筑西市誕生記念　第十二回明野薪能

かがり火のなか、幻想の世界を再現

市民や県内外から詰めかけた千人を超える多くの観客が待ちわびるなか、薪能は夕暮れ前の午後5時より開演。かがり火の下、幻想的な古の世界が蘇りました。

例年ならば満開の桜の下での開催となりますが、本年は開花が遅く2分咲き。しかし、コブシの花が見事に咲き誇り、演技者や観客を遠目に応援する中、『火入れ式』が行われました。

雰囲気が高まった舞台では『青少年のための能・狂言普及研究会』の子どもたちが、紋付袴姿で小舞『花の袖』を披露。続いて狂言『魚説法』を演じ、専門家の指導を受け本番の舞台に望んだ子どもたちに、観客から大きな拍手が鳴り止みませんでした。

その後、舞台は、素囃子『三番叟』、狂言『茶壺』が演じられ、最後の演目である能『国栖』で舞台はクライマックスを迎えます。かがり火の灯りの下で、能世界を代表する能楽師によって幻想的な古の世界が蘇り、大勢の市民を魅了しました。

▲狂言『茶壺』は多くの笑いを誘いました

■薪能豆知識■

薪能とは、神事能のひとつ。薪の宴の能の意という。陰暦2月の興福寺の修二会に、南大門の芝の上で四座の大夫によって行われた能楽。幕末で絶えたが、近年簡略化して復興、5月11日と12日に行われている。

なお、最近は、諸社寺などで薪能と名付けて、夜間に野外能を行うが、それは薪の火で照明する能の意に解した命名。薪の能。

（広辞苑より）

▲小舞『花の袖』を舞う子どもたちに大きな拍手が

▲金色の羽衣を身にまとった天女の舞『国栖』

e-mail

初めて来られた方から、お礼の言葉がメールで届きました。「明野薪能、初めて堪能させていただきました。よかったです。子どもさんたちの熱演も大変興味がありました。今回限りでなく、良き伝統芸能の継承にかかわってくれるように願っております」。